

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 9 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520470

研究課題名(和文)直示と指示・照応の面から見たドイツ語指示表現の研究

研究課題名(英文)Study of German Demonstrative Expressions from the deictic and anaphorical Point of View

研究代表者

吉田 光演 (YOSHIDA, MITSUNOBU)

広島大学・総合科学研究科・教授

研究者番号：90182790

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ドイツ語指示詞*der*、英語*this/that*、定冠詞*der*、日本語指示詞*こそあ*に着目し、先行研究の検討とWeb上のデータの比較を通じて、それらの意味の共通性と相違を考察し、次の点を明らかにした。(1)発話場面の直示と文脈照応の機能は指示表現という点で統一的に把握できる。(2)近接・遠距離の対立はドイツ語では明示的ではなく、近接と非近接の*dieser*、*der*の対比がある。(3)日本語の*こそあ*系とドイツ語*der*は、距離と無関係に話者の視点に応じて指示対象が変動する。それは、話者が直接に操作できない間接的参照視点が介在する変項解釈や、人称代名詞との対比で話題転換を導入する役割を果たす。

研究成果の概要(英文)：Focusing on German demonstrative "der", English "this/that", and Japanese demonstrative "ko/so/a", this study shows their common semantic properties and differences, and leads to the following conclusions: By reexaminations of preceding literature and investigation of the Web-corpus it is shown that (1) the functions of deixis in the utterance and the anaphoric relations in the text can be grasped in a uniform way as referential expressions, (2) the opposition of proximal and distal deixis is not explicit in German. Instead, there is a contrast of "dieser" and "der", independently of the physical distance, and (3) Japanese "sore" and German "der" are similar in that they can be used to pick up a variable-like dependent object which requires some indirect or anaphoric support by a referential (relational) framework of another referent, because the target object is not directly accessible to the speaker. Thus, the three languages have similar referential uses.

研究分野：言語学

キーワード：意味論 統語論 語用論 ドイツ語 日本語 指示表現 直示

1. 研究開始当初の背景

ドイツ語・英語の定冠詞は、国内外で既に多くの研究がある(Christophersen (1939), 関口 (1960), Hawkins (1978), Heim (1982), Loebner (1985), Grimm (1986), Vater (1986), Bisle-Mueller (1994), Lyons (1999), Helbig & Buscha (2005)等)。しかしそれに比して、発話場面に存在する対象を指す直示(deixis)に関わる指示詞(demonstrative)の研究は、指示場の原点(ここ・今・私)を論じた Buehler (1934) “Sprachtheorie”等はあるが、その数は多くない (Ehrich (1982), Ehlich (1983), Tanaka (2011)等)。直示には指標表現(indexical: ich, du)、指示代名詞(dieser, der, das)、場所副詞(hier, da, dort)、時間副詞(jetzt)など種類が多い。それ故にドイツ語の指示詞の研究は遅れてきたが、実際には、指示詞は世界のほとんどの言語に存在し、冠詞をもつ言語の定冠詞の多くは指示詞から歴史的に派生してきたと推定される(Lyons 1999)。指示詞の意味機能は、発話状況から容易に再現できるように見えるが、語彙・文法と発話状況・現場の知覚との動的な関連の分析によってのみ捉えられるというところに他の語彙の意味記述とは異なる困難がある。事実、定冠詞と指示代名詞の間には機能上重なるように見える部分があり、様々に異なる分析が提案されているが、未だ決定的でない状況にある。この状況に対して、英語・日本語との比較から言語対照的な観点から研究を進めようという着想に至った。

2. 研究の目的

定冠詞(der/das/die)、人称代名詞(er/es/sie等)に着目し、第一に、それらが発話状況(現場)やテキストにおいて担う意味と機能の共通性と相違を理論的・経験的に分析する。第二に、それらの意味と機能(直示=外界指示、文脈指示)を日本語の指示詞(コソア表現等)の意味・機能と比較対照する。第三に、これらの作業を通じて、ドイツ語の指示表現・発話状況・話者/聞き手の共有知識の間の関連性を意味論的、語用論的に理解する解釈モデルを構築し、これをドイツ語教育に活用することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 発話状況にあるモノ・人を指示するドイ

ツ語の指示表現は種類が多い。それらは、指示代名詞(限定詞dieser/jener+名詞(N)、その変異dieser hier/dieser da等)、指示詞とその強勢形(DER/DAS/DIE+N, DER/DAS/DIEと変異Der da等)、代名詞(er/es/sie等)などである。うした表現の具体的用例・頻度についてコーパスやWeb上の用例を収集し、データを分析する。項目としては、直示関連(現場指示)用法(指示対象と話者との距離の[±近][±遠]、話者から見た聞き手との距離([±近][±遠]))、現場にない対象の指示(観念・想起用法等)の用法(話者・聞き手の直接経験により想起される対象指示)。

テキスト内で使われた表現との照応関係に基づく文脈指示(前方照応、後方照応)に区分して、項目内での分析を行う。先行研究では、直示用法としてのjener(遠方対象の同定指示)は、現代ドイツ語ではあまり使用されないと説明されるが、量的に確認されていない。従って、実際のデータを確認する必要がある。jenerとの対比で[近距離]を表すdieser(この)の頻度が多いが、距離だけでなく、心理的情緒も表すとされ、分析が必要である。またdieserと、DER N, DER(定冠詞独立用法)も類似した機能として使用されることもあり、その相違は十分研究されておらず、人間やモノの対象の区別による相違(der, dieが人間に使われる場合のニュアンスなども解明されておらず、多くのデータから記述的に分析していく。

(2) 日本語指示詞(「コソア」)については、多数の研究があるが、それらの主要なものを検討し、データを収集し、上記項目との比較を行うことで、ドイツ語と日本語の相違を研究する。ドイツ語と日本語は定冠詞・人称代名詞体系については異なっている(定冠詞の有無、日本語では代名詞が未発達。代名詞による照応ストラテジー vs. ゼロ話題・ゼロ代名詞等)。しかし、日本語の指示詞は3通りの表現(コソア)があり、ドイツ語でも多くの指示表現があるため両言語間の比較が十分可能であり、研究する意義もある。また、必要に応じて英語の指示詞(this/that)とドイツ語指示詞を比較する。

(3) データの検討と同時に、ドイツ語、英語、日本語等の指示詞についての重要な先行研究を精査してその成果と問題点を抽出する。その際、Buehler等の比較的古い文献も含め、

新しいものを多く取り入れていく。言語表現と話者による発話状況の認知・対象指示という言語と知覚に関わる問題を統語論と意味論と語用論、認知科学の立場を踏まえつつ、記述・説明する枠組みを構築する。特に、ドイツ語の DER/DAS/DIE N については形態上定冠詞と指示詞の区別がつかないため、指示代名詞であるという説と定冠詞独立用法（焦点強勢化）であるという説とが競合し、未だに定説を見ない状況である (Gunke 2006)。このような問題の解決には理論的考察（意味論的形式化、強勢・焦点等）とともに具体的な用法と状況との突き合わせが必要であり、また、英語・日本語との対照によって問題が明確になる。

本研究ではこれらを総合し、直示と指示・照応の面からドイツ語指示表現の全体像を明確にする。

4. 研究成果

2012年度は、先行研究におけるドイツ語の指示代名詞などの直示表現の分析 (Buehler (1934), Zifonun et al. (1997), Duden (2005), Helbig & Buscha (2005) 等) を検討し、それらの問題点（定義、用法、意味機能）を検討した。特に、前域（文頭位置）に現れる指示代名詞 der/das/die および dieser (英語 this 対応) の機能 (人称代名詞 er/sie/es との相違) について Web データを収集して分析し、直示と照応関係、指示対象（人間かモノか）等の分類を行った。次に、日本語指示詞の先行研究 (久野 (1972), 金水・田窪 (1990), (1992) 等) の検討を行い、日本語とドイツ語の直示と照応表現を比較した（日本語「コソア」の三項対立と直示・照応の分類）。

これらの分析について、2012年8月にミュンヘン大学で開催された国際ワークショップにおいて、Yoshida (2012) “Japanische Demonstrativpronomina: dreiteilig oder zweiteilig?” (日本語の指示詞：3項か2項対立か) というテーマで発表し、W. Abraham 教授らと意見交換した。また、2012年11月に広島大学で開催された日本独文学会第61回中国四国支部研究発表会において「現代ドイツ語における指示代名詞 der の特徴」というテーマで発表した。

また、2013年2月にはオランダ・ユトレヒト大学 (de Swart 教授の「弱定名詞句プロジ

ェクト」)、ドイツ・ケルン大学 (指示意味論を研究する K. Heusinger 教授) を訪問して、日本語・英語・ドイツ語の直示表現の研究手法・分析に関して意見交換を行い、直示と照応表現に関する言語比較の問題について議論し、今後の共同研究の可能性について意見交換した。

2013年度は、ドイツ語の先行研究における直示・指示・照応表現の取り扱いを検討し、先行研究の問題点を抽出した。特に、テキストの文脈指示における照応機能について着目し、検討した。並行して Web や新聞・コーパス等で例文を集めて分析し、新聞・雑誌などテキスト種類による用例分析を行い、英語とドイツ語の指示表現の比較を行った。また、ドイツ語指示詞 (dieser, jener, 定冠詞指示用法 der/das/die) と英語指示詞 (this, that)、日本語指示詞（「これ、それ、あれ」）を比較した。この分析については、論文「現代ドイツ語における指示代名詞 der/das/die の特徴について」(吉田 2013) としてまとめた。さらに、ドイツ語と英語のテキストにおける定・不定の指示照応表現の比較に関するテーマについて溝田・吉田 (2013) として、広島独文学会で口頭発表した。また、直示表現と言語理論（普遍文法理論と意味論、統語構造と指示的意味の相互作用）との関連で、北海道大学で開催された 2013 年秋期日本独文学会シンポジウム "Linguistische Sprachphilosophie: Auseinandersetzung mit Sprache aus Sicht der Linguistik" (「言語学から見た言語哲学」代表：田中 慎) において、Yoshida (2013) が "Universalgrammatik als Schnittstelle zwischen der syntaktischen Struktur-bildung und der situationsgesteuerten Erkenntnisbildung" (統語的構造形成と状況に制御された認識形成のインターフェースとしての普遍文法) のテーマで発表し、言語哲学的考察を行った (共著 Tanaka, Leiss, Nishiwaki, Muroi, Yoshida, Abraham, (2014))。

2014年度は、日本語・ドイツ語・英語の直示・照応表現に関する先行研究を再検討し、特に中距離指示の「ソ」の英語・ドイツ語の対応 (that, der, dieser) の比較を、Web データ・コーパスを参照しつつ行い、以下の結論を導いた。(1) ドイツ語でも日本語・英語でも多くの言語で、発話場面に関わる直示表現

と談話文脈に関わる照応表現は、指示表現の観点から統一的に把握することができる。

(2) this/that, コ・ア系のように、近距離・遠距離の対立は、英語・日本語では有意味であるが、ドイツ語では近接だけが意味を持つ (this-that, コ・アの対立に対して、ドイツ語の直示では dieser のみが有意味で、遠距離 jener は現代ドイツ語では直示としてはほとんど使用されない)。従って、近接 dieser の物理的な指示範囲は広い。遠・近の対立の代わりにドイツ語では、近接と非近接の dieser 対 der の対比が存在し、後者の der は会話では多用される傾向にある。(3) 直示における話者の近接領域と遠距離領域は、テキストの文脈上の照応関係にも写像される (近接 this, コ系、dieser。遠距離の that, ア系、jener (書き言葉に限定的))。ただし、照応表現では、指示詞 der は近接領域と関係しやすい (照応する先行詞が主題領域ではなく、文の後方 (der 系から見れば近接的) の焦点領域に来る事が多い)。(4) 日本語・ドイツ語では、距離に無関係に、話者の特定視点や参照枠に応じて指示対象が変動する指示詞 (ソ系、der 系) が存在する。der, ソ系は、話者が直接に操作できない間接的な参照視点が介在する変項解釈が可能な場合 (たとえば、いわゆる口バ文のように、束縛変項解釈と類似する照応形として使用できる) 人称代名詞 er/sie/es (=he/she/it) との対比において話題転換を導入する場合である (ドイツ語 der 系)。最終的に、これらの結果を論文にまとめた (吉田 2014)。

また、2014年3月には、最終的な研究成果について、ドイツ・ポツダム大学の G. Fanselow 教授と意見交換し、今後の共同研究の方向性について議論を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. 吉田 光演, 日本語・ドイツ語・英語の指示詞の比較に関する一考察, 欧米文化研究, 査読有, 21号, 2014, 31-46.
2. 吉田 光演, 現代ドイツ語における指示代名詞 der /das/die の特徴, ドイツ文学論集, 査読有, 46号, 2013, 67-81.

〔学会発表〕(計 3 件)

1. Yoshida, Mitsunobu, Universalgrammatik als Schnittstelle zwischen der syntaktischen Strukturbildung und der situationsgesteuerten Erkenntnisbildung, Symposium (Linguistische Sprachphilosophie: Auseinandersetzung mit Sprache aus Sicht der Linguistik Moderation: Shin Tanaka), JGG (日本独文学会研究発表会), 2013年9月29日, 北海道大学.
2. 溝田 悟士, 吉田 光演, 同一指示のバズルについて, 広島ドイツ文学会研究発表会, 2013年7月20日, 広島大学.
3. 吉田 光演, 現代ドイツ語における指示代名詞 der の特徴, 日本独文学会中国四国支部研究発表会, 2012年11月10日, 広島大学.

〔図書〕(計 2 件)

1. Tanaka, Shin (ed.), Tanaka, Shin, Leiss, Elisabeth, Nishiwaki, Maiko, Muroi, Yoshiyuki, Yoshida, Mitsunobu, Abraham, Werner, 日本独文学会 (日本独文学会研究叢書), "Linguistische Sprachphilosophie: Auseinandersetzung mit Sprache aus Sicht der Linguistik", 2014年, 97頁 (分担 63-73.)
2. 岡本 順治, 吉田 光演 (編著), ひつじ書房, 講座ドイツ言語学第1巻 ドイツ語の文法論, 2013年, 283頁 (分担 1-21, 47-71, 169-191.)

〔その他〕

ホームページ等

(広島大学個人 HP)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/mituyos/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 光演 (YOSHIDA MITSUNOBU)
広島大学・総合科学研究科・教授
研究者番号: 90182790